

平成 21 年 10 月 日

草の根技術協力事業 モニタリングシート

※電子データも提出してください。

PDM（～なければ案件概要票）からプロジェクト目標、成果、活動を転記する。

| | | | |
|--|---|--|--|
| 1. 対象国名・事業名 | スリランカ コットマレー地域の小農民によるアラビカコーヒー栽培のコミュニティ開発 | | |
| 2. 事業実施団体名 | 特定非営利活動法人日本フェアトレード委員会 | | |
| 3. 事業実施期間 | 平成 19 年 9 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日 | | |
| プロジェクト目標 | コーヒー豆の選別と乾燥・調整に必要な資機材が整い、アラビカ種の生産環境と体制が整う。 | | |
| 成果1 活動1-1 JICA 九州のラヴァナゴダ村の調査 活動1-2 スリランカフェスタ東京 | 活動実績 農業輸出局グラナトゥナ氏、ルーパシンハ氏、ウクウェラ氏、バスナヤカ氏及び農民と共に今期のラワナゴダにおけるコーヒー収穫体制についてミーティングを行った。 JICA 九州のラワナゴダ村の調査及び加工工場建設一周年 スリランカ・フェスティバル(東京)にてスリランカ・コーヒー事業紹介及び試飲(サンプル配布) | 特記事項(計画通りにいかなかった理由・問題点・注目点) 昨年は、コーヒーチェリーRs.40/kg で購入したが、その分だけでは乾燥作業にかかる費用が十分でなかった。その点を反省し、今回はチェリーRs.50/kg でフェアトレード委員会が購入する事及び自主財源として日曜市を開催し組合の収入源とすることで、今年度はスムーズに加工作業から輸出へ移行できるように話し合った。 また、昨年の輸出豆の 20%は不適合だった状況や若干小石等の異物混入が認められた。(昨年は、初めてということもあり適合豆・不適合豆の微妙な差異が判別できなかった。)そのため、今年は日本で外された不適合豆をサンプルとして常置しておくことで、比較の対照とし作業の迅速化を図るようにした。そして、小石混入等に関しては豆を直に地面に置くのではなく、接触しないように必ず敷物をすることの徹底をする。 自主財源確保のため、市を催すための販売台を自分たち制作するなど今まで受身的であったものが自発的になってきたことに注目すべき点があった。 | |

四半期振り返りコメント(団体)

今四半期において、昨年の経験や計画通りに進まなかった点を踏まえて、今シーズンの進め方や今後の体制作りについて収穫前に改めて確認を行った。上記特記事項にも記述したが、昨年は加工作業に伴うコスト計算が甘く不十分であったという点があり、昨年の Rs.40/kg を見直し Rs.50/kg で JFTC がチェリーを購入し、その一部を組合の運営費に充てる様にすることで、より作業の効率化を図ることに繋がると思われる。

また、作業の方法も昨年と変更する事で小石混入(機械乾燥用プレート(網状になっているため)が、直接地面に触れる事があったので、それがないように敷き物をするなど徹底する)の機会を最小限に防いだり、輸出不適合豆が減少(昨年は、適合豆と不適合豆のサンプルがなく微妙な差異の判断が難しかったようなので、今回は比較対照できるようにサンプルを用意し判断の基準とする)し、品質管理及び向上に努めることができる。そして、作業効率の迅速化にも繋がっていく。

前述の組合の運営資金を補うための自主財源確保として、市を開催するようになり、そのための販売台を自分たちで制作するなど(農民を含めた)組合の自発的な行動が現れ始めた。そのことが、今回 JICA 九州の調査の際での農民たちが口にした「村が活性化した」へと結び付いていたのではないかと思われる。実は、この事が重要で JFTC の当事業における掲げてきた目標の一つでもあり、これまでに行ってきた事の成果であると感じているところでもある。

東京でのスリランカ・フェスティバルに農業輸出局局長のグナラトゥナ氏も参加し、コーヒー事業の紹介及びコーヒーのサンプルの配布を行った。そして、コーヒー消費国である日本の反応を局長にも感じてもらうことで、少しでも共有できる認識として今後のコーヒーの販路拡大に役立つことになっていくと思われる。

在外コメント

国内機関コメント